

## プロフィール

### 仲道 郁代 ピアノ Ikuyo Nakamichi, piano

桐朋学園大学1年在学中に第51回日本音楽コンクール第1位、増沢賞を受賞。ミュンヘン国立音楽大学に留学。ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、メンデルスゾーン・コンクール第1位メンデルスゾーン賞、エリザベート王妃国際音楽コンクール入賞。88年に村松賞、93年にモービル音楽奨励賞を受賞。古典派からロマン派まで幅広いレパートリーを持ち、日本の主要オーケストラはもとより、海外のオーケストラとの共演も数多く、人気、実力ともに日本を代表するピアニストとして活動している。



@kiyotaka Saito

これまでにサラステ指揮フィンランド放送交響楽団、マゼール指揮ピッツバーグ交響楽団、バイエルン放送交響楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ズッカーマン指揮イギリス室内管弦楽団 (ECO)、フリーベック・デ・ブルゴス指揮ベルリン放送交響楽団、P.ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団と共演。99年にはカーネギーホールでリサイタル・デビュー、2001年にはサンクトペテルブルグ、ベルリンでコンチェルト・デビュー。05年には、英国チャールズ皇太子夫妻ご臨席のもとウィンザー城で行われたイギリス室内管弦楽団 (ECO) 主催の「結婚祝祭コンサート」に出演。室内楽ではストルツマン、ハーゲン弦楽四重奏団、ブランディス弦楽四重奏団、ベルリン・フィル八重奏団、ゲヴァントハウス弦楽四重奏団等と日本ツアーを行った。

近年では、2022年12月にブダペストのリスト音楽院でヤーノシュ・コヴァーチュ指揮ハンガリー国立フィルハーモニー交響楽団と、そして2023年4月にはケン・シェ指揮バンクーバーメトロポリタンオーケストラと共演し高評された。

CDはソニー・ミュージックレーベルズと専属契約を結び、レコード・アカデミー賞受賞CDを含む「仲道郁代ベートーヴェン集成～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集」や、「モーツァルト：ピアノ・ソナタ全集」、「シューマン：ファンタジー」、「ドビュッシーの見たもの」など多数リリースしている。著作には『ピアノの名器と名曲』『ショパン鍵盤のミステリー』『ベートーヴェン鍵盤の宇宙』（ナツメ社）、『ピアニストはおもしろい』（春秋社）等がある。

2018年よりベートーヴェン没後200周年の2027年に向けて「仲道郁代 The Road to 2027 リサイタル・シリーズ」を展開中。

一般社団法人音楽がヒラク未来代表理事、一般財団法人地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。令和3年度文化庁長官表彰、ならびに文化庁芸術祭「大賞」を受賞。

オフィシャル・ホームページ <https://www.ikuyo-nakamichi.com>

## *Ikuyo Nakamichi* 仲道 郁代 ピアノ・リサイタル

*Piano Recital*



2024年2月25日(日)

15:00 開演

秋篠音楽堂

### お問い合わせ

秋篠音楽堂 TEL 0742-35-7070 (10:00~17:00)  
〒631-8511 奈良市西大寺東町2-4-1 ならファミリー6階  
<https://www.akishino-ongakudo.com>

主催 秋篠音楽堂運営協議会

## プログラム

### L. v. ベートーヴェン

#### ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 Op.13「悲愴」

- I Grave - Allegro di molto e con brio
- II Adagio cantabile
- III Rondo, Allegro

#### ピアノ・ソナタ 第13番 変ホ長調 Op.27- 1

- I Andante - Allegro
- II Allegro molto e vivace
- III Adagio con espressione
- IV Allegro vivace

#### ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op.27- 2「月光」

- I Adagio sostenuto
- II Allegretto
- III Presto agitato

——— 休憩 ———

### J. ブラームス

#### 4つの小品 Op.119

- 第1曲 間奏曲 ロ短調
- 第2曲 間奏曲 ホ短調
- 第3曲 間奏曲 ハ長調
- 第4曲 ラプソディ 変ホ長調

### F. ショパン

#### ワルツ 第9番 変イ長調 Op.69- 1「別れのワルツ」

#### バラード 第1番 ト短調 Op.23

#### ポロネーズ 第6番 変イ長調 Op.53「英雄」

## 曲目解説

### L. v. ベートーヴェン（1770-1827）

#### ◆ピアノ・ソナタ第8番 ハ短調 Op.13「悲愴」

ベートーヴェン初期のピアノ・ソナタの頂点をなす傑作。1797～98年に作曲され、ベートーヴェン自身により「グランド・ソナタ・パテティーク」と題された。悲愴感を音楽で表現するというきわめてベートーヴェン的な発想で書かれたこのソナタは、従来のソナタには見られない荘重な序奏で始まる。この沈鬱な楽想はさらにこの楽章の展開部とコーダにも現れて、楽章全体を支配するが、こうした独自のスタイルが、この作品では随所に見られ、たとえば調性の設計においても、古典派の定石を打ち破るベートーヴェン流の手法が用いられている。

- 第1楽章 グラーヴェーアレグロ・ディ・モルト・エ・コン・プリオ
- 第2楽章 アダージョ・カンタービレ
- 第3楽章 ロンド：アレグロ

#### ◆ピアノ・ソナタ第13番 変ホ長調 Op.27- 1

有名な〈月光ソナタ〉と共に出版されたこの〈第13番〉のソナタは、ベートーヴェンが30歳の頃にあたる1800～01年に作曲された。ベートーヴェンはこれら Op.27の2曲のソナタに「幻想曲風ソナタ Sonata quasi una Fantasia」というタイトルを与え、伝統的なソナタの形式にとらわれない自由な書法で作曲にあたった。具体的には、第1楽章にソナタ形式を採用しないこと、即興的な曲の運びにより内面の高揚を強く意識した音楽作りがなされていることなどがその特徴となっている。曲は全4楽章構成を採りながらも、全ての楽章が続けて演奏されるよう指示され、そこには様々な感情の起伏を経て力強い帰結に至るという、ベートーヴェンならではの音楽が追求されている。

- 第1楽章 アンダンテ－アレグロ
- 第2楽章 アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ（スケルツォ楽章）
- 第3楽章 アダージョ・コン・エスプレッシオーネ
- 第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

#### ◆ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調 Op.27- 2「月光」

詩人のL. レルシュタープがその第1楽章を「月夜のルツェルン湖のさざ波に揺れる小舟のようだ」と形容したところから、「月光」の呼称で広く知られるようになったこのソナタは、ベートーヴェンの創作上の「実験期」といわれる時期、1801年に作曲されている。ベートーヴェンはこの作品を「幻想曲風ソナタ」と命名し、従来のソナタの形式にとらわれない自由な発想で曲作りにあたった。作品を献呈されたジュリエッタ・グイチアルディは、ベートーヴェンにピアノを習っていた14歳年下の伯爵令嬢で、有名な「不滅の恋人への手紙」の相手とも目される女性。身分の違いゆえに実ることのなかった彼女との恋愛体験が、この曲には反映されているともいわれている。

- 第1楽章 アダージョ・ソステヌート
- 第2楽章 アレグレット
- 第3楽章 プレスト・アジタート

### J. ブラームス（1833-1897）

#### ◆4つの小品 Op.119

ブラームス後期の個性的なピアノ小品には、構成美とも技巧とも違うブラームスのロマン的叙情が美しく綴られており、ことに最晩年の作品の清澄な味わいは格別である。〈4つの小品〉Op.119は1892年、ブラームス59歳の時に発表された4集のピアノ小品集の1つで、ブラームス最後のピアノ曲となったもの。3つの間奏曲とラプソディで構成され、4楽章構成のソナタを思わせる全曲は、詩的な情緒と綿密なピアノズムに彩られているが、そこには過ぎ去った時代への懐古の情がにじみ出ており、奥深い感銘を残す。

- 第1曲 間奏曲 ロ短調
- 第2曲 間奏曲 ホ短調
- 第3曲 間奏曲 ハ長調
- 第4曲 ラプソディ 変ホ長調

### F. ショパン（1810-1849）

#### ◆ワルツ 第9番 変イ長調「別れのワルツ」

1830年、20歳のショパンが故国ポーランドを離れてウィーンに移った頃、ウィーンではちょうど、ヨハン・シュトラウスやランナーのワルツが一世を風靡していた。ショパンはこうした舞曲曲としてのワルツを、より優雅で抒情詩的な音楽と融合させて、芸術的なピアノ音楽に作り変えようと、独自のワルツを書き始めたといわれている。Op.69の2曲（第9、10番）はショパンの死後、フォンタナにより出版された。第9番変イ長調Op.69- 1はマリア・ヴォジンスカとの恋にまつわる曲で、「別れ」の別名をもつ（1835年作曲）。

#### ◆バラード第1番 ト短調 Op.23

4曲のバラードはいずれも1835年から1842年という創作の絶頂期に作曲され、ショパンのピアノ音楽の一大頂点をなす傑作として知られている。バラード（譚詩曲）とは一般には物語風の楽曲をさすが、独自の自由なスタイルをもつショパンのバラードはまさに、ピアノが語る一篇の詩と呼べるだろう。この〈第1番〉は、レチタティーヴォ風の荘重な序奏にはじまり、坦々と進みながらもやがて熱情を帯びる第1主題と静穏な第2主題による、一種のソナタ形式で書かれている。

#### ◆ポロネーズ第6番 変イ長調 Op.53「英雄」

祖国の栄枯盛衰に対する様々な思いを込めて書かれたショパンの16曲のポロネーズには、雄壮なリズムをもち華やかな往時を偲ばせるものと、逆境時代のポーランドを描いたかのような陰鬱な気分をもつものの2つのタイプがあるが、この〈英雄ポロネーズ〉はいうまでもなく前者を代表する傑作。1842年に作曲されたショパン円熟期の一曲であり、リズム的、和声的に変化に富んだ楽想や、堅固で広大な構成、際だった演奏効果など、絢爛たる魅力にあふれている。曲は、長い序奏に続いてポロネーズの力強いリズムが開始され中間部では性格的な3つの楽句が巧妙に配置される。

執筆：柿沼 唯／作曲家